東西遊記

1

橘南谿

宗政五十緒 校注

東洋文庫 248

東西遊記 1

橘南谿
宗政五十緒 校注

平凡社

むねまさ いそお
宗政 五十緒
昭和4年岡山市生。
昭和33年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。
現職：龍谷大学（文学部）教授。
専攻：国語学・国文学。
主要編著書：『西鶴の研究』（未来社），『近世京都出版資料』（日本古書通信社），『近世畸人伝・続近世畸人伝』（平凡社）など。

東西遊記1 〔全2巻〕 東洋文庫 248

1974年2月26日 初版第1刷発行
1979年10月1日 初版第4刷発行

定価 1,300円

校注者 宗政五十緒

東京都千代田区四番町4番地
発行者 下中邦彦

印刷 株式会社 共立社印刷所
製本 株式会社 石津製本所

発行所 郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京8-29639 株式会社 平凡社

©株式会社 平凡社 1974
Printed in Japan

不良本は，直接小社サービス課でお取替え致します（送料小社負担）

凡　例

一、本書の底本は次のとおりである。

1　東遊記、東遊記後編、西遊記、西遊記続編は、それぞれの版本。

2　東遊記補遺、西遊記補遺は、竜谷大学図書館蔵東遊記、西遊記それぞれの写本。ただし、両補遺はともに底本の版本不載の章のみの抄出である。

二、本文作成に当っては次のごとき方針に従った。

1　(イ)東遊記、東遊記後編、西遊記、西遊記続編、と、(ロ)東遊記補遺、西遊記補遺、とではその方針に若干の違いがある。この点、本書の利用者の注意を請うところである。それは——。

(イ)の諸本は、近代刊行の校注本が存するので、本書では今日の読者に読み易いように配慮した。

(ロ)の諸本は、今日まで翻刻されたことのない文献であるので、研究者の利用にも供しうるように配慮した。

2　右の(イ)、(ロ)に共通する本文作成の方針は次のとおりである。

イ　原文に用いられている古体、異体、略体などの文字は、現在通行の文字に改めた。

ロ　原文にあった濁点に、更に校注者によって濁点、半濁点を付加した。

ハ　原文には句読点はないが、校注者が新たに加えた。

ニ　漢字表記の畳字は「々」に変えた。

ホ　通読に便利なように新たに段落を切り、行を改めた。

ヘ　固有名詞の類などには、通読の便利を配慮して、その本文の右側に（　）を付して注を加えた。

ト　原文の使用漢字で、現在の使用慣例と大きく異なるものは、その本文の右側に（　）を付して現在使用の漢字を注した。

チ　原文にはないが、本文の通読に便利であると思われる点は（　）を付して注した。

リ　本文の右側に付することが字数などの都合で困難な校注者の注は、番号を付して各章の本文の次に掲げた。

ヌ　東遊記三書、西遊記三書にそれぞれの全章の通し番号を新たに付した。

ル　原本の挿絵はすべて収め、原本の掲載に近い本文の箇所に載せた。

3　(イ)のみに必要とした本文作成の方針は次のごとくである。

イ　原文の仮名遣いは、和歌、俳諧、歌謡、漢詩文を除いて、すべて現代仮名遣いに改めた。

ロ　原文にあった漢字表記の振り仮名に、更に、校注者により適宜、振り仮名を付加した。

ハ　送り仮名は原則として、現在通行の慣用に準じて不足の場合はこれを加えた。ただし、連語では上の語の送り仮名は原則として加えなかった。また、用言の名詞化した語にも原則として送り仮名は新加しなかった。なお、原文が現在通行の慣用から見て送り過ぎになっているものは、送り過ぎの原文のままにしておいた。

ニ　仮名の畳字はもとの文字に改めた。

ホ　表記の明らかに誤りと思われるものは、これを改めた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

へ　漢文表記の部分には、校注者がその本文の次に（　）を付して読み下し文を付した。

ト　底本の次の部分は掲載位置を変更した。変更した部分と原位置は――。

い　松本愚山撰「東西遊記序」は『東遊記』の巻頭。

ろ　伴蒿蹊撰「東西遊記序」は『西遊記』の巻頭。

は　「凡例」は松本愚山撰序文の次。

に　「目録」は、

『東遊記』は「凡例」の次。

『東遊記後編』は巻一の巻頭。

『西遊記』は伴蒿蹊撰序文の次。

『西遊記続編』は巻之一の巻頭、各巻の巻頭。

4　(ロ)のみに必要とした本文作成の方針は次のごとくである。

イ　つとめて原文に忠実なるように心がけた。ただし、通読の便を考慮して、2以外に、更に以下のごとき校注者の私意を加えた。

ロ　漢字表記の左傍に付してあった振り仮名は、〔　〕を付して、これを右傍に移した。ただし、右傍に振り仮名が付されてあった場合には、その下に移した。

東西遊記 序（原漢文）

石州別駕橘君（石見介）、医ヲ攻ムルヲ以テ四方ニ漫遊ス。足跡殆ンド天下ニ遍シ。其ノ記載スル所、率ネ皆、修治ノ案、経験ノ方、而シテ嘉儁有レバ則チ必ズ咨イ、人卓行有レバ則チ必ズ訪ウ。名山ニ登リ、古蹟ヲ覧、殊俗ヲ歴問シ、異聞ヲ捜采スル者数十巻ニ及ブ。名ヅケテ東西遊記ト曰ウ。好事家、往々之ヲ伝誦シ謄写シテ蔵シテ以テ帳中ノ秘ト為ス者有ルニ至ル。書賈因リテ屢々刻ヲ請ウ、君終イニ肯ンゼザル事久シ。一日俄カニ余ニ語リテ曰ク、此ノ書ノ行ワルルヤ吾ガ意ニアラザル也、何トナレバ蓋シ家業ノ著述猶未ダ稿ヲ脱セザル者居多也、而シテ首トシテ兎園ノ冊ヲ用イテ木ニ災ス、恐ラクハ有識ノ誚ヲ致サン、而シテ坊間利ヲ射ルノ徒、私刻ヲ謀ル有ルニ会ス、是ニ於イテ已ム事ヲ獲ズシテ遂ニ剞劂ニ授ク、将タ之ヲ奈何、盍ンゾ吾ガ為ニ一言ヲ書シテ以テ巻端ニ弁ラシメザルト。余乃チ竊カニ謂イテ曰ク、夫ノ橘君、人ト為リ道ニ志シ行ニ励ム、旁ラ唐詩ヲ好ミ国風ニ及ブ、鐘律ヲ考エ、星度ヲ試ム、其ノ医ヲ為スヤ固ヨリ亦小伎ニ隠ルルノミ、而ルニ況ンヤ此ノ書其中ニ就キテ特ニ又、緒余ナル者ヲヤ、然レドモ善ク是ノ編ヲ読ム者、以テ秉彝ノ良心ヲ興起感発スベクンバ則チ是レ元気ヲ還ス也、井蛙ノ見ヲ破リ、夏虫ノ疑イヲ釈カバ則チ是レ沈痼ヲ起コス也、其ノ人ヲ医スルノ効亦捷シ、必ズシモ刀圭ノ間ニ事トセズ、此レ豈ニ、世ノ游ヲ紀ス蔓詞弥文ノ徒ニシテ

風月ノ談ヲ資ケ觴咏ノ具ニ供ウルノミナル者ト日ヲ同ジウシテ語ルベキヤ、君其レ多ク譲ル事勿レト。是ヲ序ト為ス。

寛政乙卯歳秋八月

愚山　松本　慎

松本慎印

憲幻

東西遊記 序

史遷が跡を追いて名山大川を探るは丈夫のしわざなるべし。しかはあれど、官ある人は身を意にまかせず、処士は路費にとぼし、いかにともすべからずとなん、謝肇淵がなげきはさることなり。はた是にくわうるに、いとかたきことなんかずかずあるべき。まず心剛に、身健ならざればあたわず。旧記をしらざれば勝地の感なし。文学にともしければ録すべからず。かく取あつむることのかなわねばにや、ここにはさる人もしるせる文もいとまれなり。むかし郡県の政なりし代、国々の守、掾などにてくだれりし人々、歌よみしたる所々は、名所とて今も聞ゆれど、時うつりて、ありしにもあらぬが多く、国々の風土記といえるも大かたにほろびたれば、其由もまたしられず。中頃に能因、西行の両法師などこそけしかるさかいへも執行せられぬと聞こゆれど、紀行こまやかならず。後には宗祇法師あれど、是も名だたる所斗りをあらあらしるされたれば、其けしきさえ明らかならず。まして土風、人情をや。わずかに熊野山中の小児が米をしらず、越路の雪に妖怪のあらわれしなどいえるたぐいのみぞ、僻境のおもむきをしるのよしにはありける。ここに此西東遊記は橘君子の著わす所にして、其質かのかたきことどもをかね備えて、危を犯し、嶮を凌ぎ、年月を重ね、実をもて録するところなり。其勇其志感ずるにあまりあり。はた仁義を基とせる物から、所々忠孝の人の行

状を記し、政の善悪をもおもわしむるは、一言半句の間にも人を勧むるの微意みゆるなん、世に希有なる書というべし。さるにある人のいう、此君子、人の為にはかるはよし、自らかえりみるにはいかに。其山川跋渉の間、幾たびか死地に入られたりしは、王陽がにくむ所、命をしるものは巖牆のもとにたたざるのいましめにもたがえりと。予いう、然り、しかれども、志ところあるものはまたかからでは其志成るべからず、孔夫子の宋に窘しみ、陳蔡に厄し給いしも、みちを天下に施してんの志によりて也、仏徒にしては玄奘三蔵のごとき、流砂の難を犯されけるにこそ、其願はなりけらし。今、橘君も其身をわすれて、医療の術を極め、ひろく世を救い、遠く後にほどこさんの志なれば、其間には北方の強もまじるべけれど、其過はみずからしりて、門生の詩にも感悟せられたれば、他の口を入るべからず、およそ此筆記を得て、居ながらに千里の外をしるは、又なきたまものならずや、まいて、おのれは若きより遠遊のねがいはありながら、其かたはしにも及ばで、今はいたずらに頭の霜を重ね、閨の埋火をたのむのみなれば、わきて此記に心酔せりとなんこたえ侍りき。ついにこれをしるして橘君によせ侍るは、序ともなりなましや。

閑田子　蒿蹊（伴）

棹湖　書

雪南

湖棹

凡　例

一、予、医学修行の為に漫遊する事、前後合わせて五年、東西南北到らざる所なし。然るに此書只、東西遊記と名付くるものは、京を日本の中央とし二つに分かちて東西とし、南北は其中にこむるもの也。

一、予が漫遊、もと医学の為なれば、医事にかかれることは雑談といえども別に記録して、同志の人にも示す。只、此書は旅中見聞せる事を筆のついでにしるせるものにして、強いて其事の虚実を正さず。誤りしるせる事も多かるべし。見る人、其杜撰をとがむことなかれ。

一、此書中にしるせる事、其事々々に付きて思い考うることも多けれども、わざと此書には愚按を加えず。議論取捨は見る人の心にあるべし。

南　谿　誌

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

目次

凡例……i
東西遊記 序（松本愚山撰）……xi
東西遊記 序（伴 蒿蹊撰）……xiii
凡例（橘 南谿誌）……xv

東遊記

巻之一

一 鎌倉（神奈川）……三
二 竹根化レ蟬（福井）……五
三 十府の里（宮城）……七
四 吹浦の砂磧／円山応瑞画（山形）……八
五 蘇武社（秋田）……一一
六 埋木（宮城）……一三
七 熊突／山口素絢画（富山）……一四
八 言葉石（福井）……一七
九 甲冑堂（宮城）……一八

巻之二

一〇 松前の津波（青森）……二一
一一 寒気指を落とす（秋田）……二三
一二 小杉の感／渡辺南岳画（富山）……二五
一三 名立崩れ（新潟）……二八
一四 米山（新潟）……三〇
一五 九十九橋／福居竹堂画（福井）……三一
一六 塩竈（宮城）……三五

巻之三

一七　文武の余風（宮城・富山）……三八
一八　正木の劔術／長沢芦雪画（岐阜）……四一
一九　丹後の人（青森）……四四
二〇　幸の神（山形）……四六
二一　蜃気楼／吉村蘭洲画（富山）……四七
二二　佐渡わたり（新潟）……五〇

巻之四

二三　親不知（新潟）……五五
二四　義経の笈（山形）……五七
二五　胡沙吹／呉月渓画（青森・秋田）……五九
二六　藤樹先生（滋賀）……六二
二七　阿古屋の松／円山応受画（山形）……六六

巻之五

二八　秋田蕗（秋田）……七一
二九　朱谷（青森）……七二
三〇　化石渓（福井）……七三
三一　浮島／吉村孝敬画（山形）……七四
三二　大骨（岩手）……七九
三三　金華山／法眼東洋画（宮城）……八〇
三四　七不思議（新潟）……八四

巻之五末

三五　平泉／浅井義篤画（岩手）……八九
三六　三尊窟／村上東洲画（静岡）……九五
三七　不食病（愛知）……一〇〇

東遊記　後編

巻之一

三八　壺の石ぶみ（宮城）……一〇五
三九　蛮語（岩手）……一〇七
四〇　葡萄嶺雪に歩す（新潟）……一一九

巻之二

四一 竜燈（富山）……一二七
四二 新潟（新潟）……一二八
四三 三馬屋（青森）……一二九
四四 狐の義理（新潟）……一三一
四五 駿河の名（岩手）……一三四
四六 三本木台（青森）……一三五
四七 錦木（青森）……一三七
四八 竜の鱗（新潟）……一三八
四九 蚌珠（新潟）……一三九
五〇 養軒が詩……一四一

巻之三

五一 四五六谷（岐阜）……一四五
五二 斎藤五郎兵衛（福井）……一四六
五三 北極星……一四七
五四 登竜（新潟・富山）……一四八
五五 黄鐘調（福井）……一五〇
五六 箒木（長野）……一五三
五七 善光寺（長野）……一五四
五八 諏訪湖（長野）……一五六
五九 鶴岡の慈悲（山形）……一六〇

巻之四

六〇 熊野御前（静岡）……一六三
六一 羽州の鬼（秋田）……一六四
六二 松島（宮城）……一六八
六三 舞楽（新潟）……一七四
六四 漢の文帝（福島）……一七六
六五 戸隠山（長野）……一七七
六六 大魚（北海道）……一七九
六七 塔影（長野・京都）……一八〇

巻之五

六八 手取川の風雪（石川）……一八二

六九　床下の声（福井）……一八四
七〇　飛根の城跡（秋田）……一八五
七一　舎利浜（青森）……一八七
七二　銅山（秋田）……一九〇
七三　広徳寺の門（東京）……一九一
七四　気候……一九四
七五　名山論……一九六
七六　鍬先（北海道）……一九八
七七　地気……二〇一

八三　箏の伝来（富山）……二一七
八四　孝子（富山）……二一三
八五　湖水切抜（福井・滋賀）……二一四
八六　水落神明（福井）……二一九
八七　文書拭レ穢（秋田・山形）……二二〇
八八　鍛冶屋敷（新潟）……二二一
八九　姫川波浪（新潟）……二二二
九〇　春日山（新潟）……二二五
九一　信夫摺（福島）……二二七
九二　安達原（福島）……二二九
九三　舌切雀（栃木）……二四〇
九四　方銭（宮城）……二四一
九五　空穂舟（新潟）……二四三
九六　篤志（福井）……二四四
九七　鍋木氏……二四七
九八　良民（福井）……二四八
九九　菊石（富山）……二五五
一〇〇　燕沢碑（宮城）……二五五

東遊記補遺

八六　漂流（石川）……二〇五
八七　堀抜の井（福井）……二〇七
八〇　鵯鶏変雄鶏（福井）……二〇八
八一　義貞の像（福井）……二〇九
八二　秋田の人材（秋田）……二一〇

一〇一　土を薪にす（新潟）……二五八
一〇二　遊魂（秋田）……二五九
一〇三　籠の渡り（富山）……二六〇
一〇四　饑渇負（青森）……二六一

解　説……二七一
地域別項目索引……巻末

東遊記

東遊記後編
東遊記補遺

橘南谿著
宗政五十緒校注

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor